



大手通坂之上町地区再開発事業

(仮称)

米百俵プレイスから 始まる新たな未来

連載

その回 アート

かつて先人は未来を見据え、長岡のまちの礎を築きました。そして今も同じ志を持って活躍する人がいます。次代を担う若者たちにその想いを伝え、未来へとつなぐ「米百俵プレイス（仮称）」への期待の声と魅力を紹介します。
岡中心市街地整備室 ☎ 39・2807

全国初「現代美術」を冠した美術館を開館



— 実業家で先駆的な現代美術収集家 —

こまがた じゅうきち
駒形 十吉

明治34(1901)年～平成11(1999)年

商工会議所会頭として復興祭（長岡まつりの前身）に尽力。収集品は駒形十吉記念美術館などに収蔵。

経済界の重鎮であり、長岡から日本全体の芸術を見据え、現代美術の新たな道を切り開いた人。昭和39年に長岡現代美術館を開館。毎年「美術館賞展」を開催し、賞金の授与のほか、作品を買い取って展示し、若手作家の発掘育成にも力を注ぎました。画期的な美術館は国内外の注目を集め、ニューヨーク近代美術館の部長も来館し賞賛しました。中でも、外壁に設置された現代美術家・斎藤義重によるレリーフ「大智浄光」は、美術館の象徴でした。

美術館は、昭和54年に閉館しましたが、建物は長岡商工会議所が取得。レリーフはそのままの姿で残され、多くの市民に愛されました。

“アート”が新たな時代を切り開く

「アート」とは、自身の個性を表現すること。芸術家に限らず、個性を表現する人は、すべてが「アーティスト」であると言えます。アートという言葉には、広い意味があるのです。

そして、今ではアートとデジタルが融合し、表現を発信しやすい時代になっています。一方で、僕の学生時代は、自分の足と目で情報を見つけていました。実際に自分で情報を探せる場所、表現を受け入れる場所も必要です。



長岡造形大学
学長

馬場 省吾 さん

平成6年、大学開学時に講師として着任。専門は金属工芸。学部長などを経て今年4月に学長に就任。地域と“協創”する大学として、産学官との連携に取り組む。

米百俵プレイスは、幅広い世代が、表現を発信したり、受け入れたりする多様な経験ができる「表現の場」になってほしいですね。

さらに、アートは、テクノロジーと結びつくことで、豊かで新しい発想を生み出し、時代を切り開いていきます。

4大学1高専と企業が連携して起こる化学反応が、数値や技術だけでは解決できないことを、一気に突破できる起爆剤になることを期待しています。

米プレ
こんなトコ

往年のアートが放つエネルギーを活動の源に



▲「屋上庭園」のイメージ

5階の屋上庭園にはレリーフ「大智浄光」を設置し、かつての長岡現代美術館の記憶を受け継ぐ空間として整備します。アートに触れながら、学生や企業の交流や食のイベント、読書や学習、仕事ができるスペースです。